

## 研究能力強化セッション3

## 編集委員長セッション：『経営行動科学』誌に採択されるには

経営行動科学学会機関誌編集委員長，名古屋大学 犬塚 篤  
事例論文提供者，福岡女子大学 櫻木 理江

## 1. 企画の趣旨

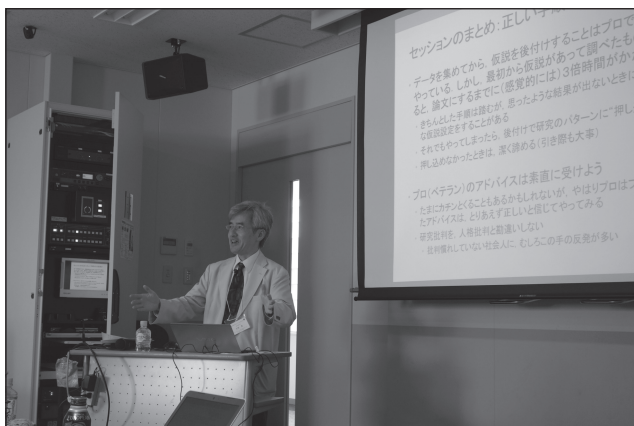
『経営行動科学』誌は、経営行動科学領域をリードする雑誌として、優れた学術論文を世に提供し続けてきた。掲載される論文の質の高さは、紛れもなく厳正かつ公正な論文レビュー・システムの質の高さを反映したものであり、本学会が誇ることのできる最大の資産のひとつといえよう。

さて、編集委員長の喜びといえ、投稿者に採択通知を出す瞬間である。私自身、初めて論文が採択された時の胸の鼓動は、15年以上経過した今となっても印象深く刻まれている。そんな人生の記憶に残る仕事に関わる者として、採択通知を受け取った投稿者の顔を思い浮かべながら帰宅する日は何ともすがすがしい。

一方で、本学会のレビュー・システムの質の高さを前に、弓折れ矢尽きる若手研究者の姿も見てきた。不採択になる論文には共通のパターンがある。もちろん、そこには論文の構成や分析技法といったお作法としての側面もあろう

が、研究を遂行する上で、指導教員から適切なチェックがなされていないのではないかと感じる場面に出くわすことも少なくなかった。

そこで本セッションでは、『経営行動科学』誌の査読の実態を報告した上で、本誌に実際に投稿された論文を事例としながら、論文投稿をする上での留意事項、論文改訂の方向、レフェリーコメントの対応方法などについて討議する場を設けた。セッションは大きく2部構成とし、1部では『経営行動科学』誌の審査の現状について、編集の立場から解説した。2部では、論文修正セッションに移り、参加者の方々と共に事前に配布された事例論文の問題点を把握し、さらにそれを修正していくラウンドテーブル式の参加型セッションとした。想定した参加者は、研究論文を初めて投稿する博士課程の学生、もしくは博士号取得後数年の駆け出し研究者であったが、ほぼ想定通りの結果となった。



## 2. セッションの実際

### 2.1 『経営行動科学』誌の審査の現状

筆者（犬塚）が編集委員長に着任した2016年5月から大会時までにおいて『経営行動科学』誌が投稿を受け付けた論文は26本ある。現在も審査進行中の論文があり確定した数字は言えないが、採択率は3～4割程度と推定される。編集委員長として心掛けていたことのひとつは迅速な審査であり、受稿日から1次審査結果通知までのタイムラグの平均日数は65日（最長27日，最長122日）と、海外一流誌並みの審査の早さを維持している。

第一著者を大きく「指導教員との共著による大学院生」「単著で投稿する大学院生」「プロパー（助教以上の大学）研究者」と区分してそれぞれの採択率を算出したところ、「単著で投稿する大学院生」の採択率が突出して低い。主な不採択理由としては、「論文の理論的な位置づけが不十分」「レビューができていない／概念定義が不十分」というものである。理論的な問題を後回しにデータを収集してしまう傾向は、何も大学院生に限ったことではないが、指導教員からの適切な指導体制の下で書かれた大学院生の論文に比べると、その稚拙はやはり明白である。

このように、不採択となる論文には共通のパターンがあるが、正直なところ、編集委員長の手に届いた時点でそうした論文はほぼ同定できる。そこで、本セッションでは不採択となる論文の典型的な3つのパターンを紹介した。なかでも多いのは、自分の関心のある事柄を中心にとりあえずアンケートをしてしまうパターンである。明確な仮説をもたずに作ったので、論文を書く段階になって論理的につながらず、まともな考察が書けていない。

また、レフェリーコメントへの対応についても、特に若手の研究者は感情的になってしまい、通るはずの論文も通らなくなってしまうことが散見された。レフェリーとの応答は一種の

心理戦であるが、感情戦になってしまったら著者側にまず勝ち目はない。セッションでは、審査過程でよく見かける4つの悪い対応例を紹介しながら、レフェリーコメントの対応方法に関するtipsを紹介した。

編集委員長としては、特に大学院生に対しては指導教員による適切な指導の下で（共著体制で）投稿することをお勧めしたい。単著で出すことが博士号取得の条件になっている大学院もあるのかもしれないが、研究の初心者が自力で『経営行動科学』の壁を突破しようとするのは自滅的行為だと感じる。

### 2.2 論文修正セッション

もともと、本セッションでは研究における“べき論”を扱うつもりはなかった。「わかる」ことと「できる」ことは所詮異なるからである。結果として「できてしまった」論文にどう対処すべきなのか、それこそが投稿者が直面する課題ではなからうか。そこで、このセッションでは、本誌のレビュー・システムの壁を突破する方法について、実際に投稿された論文を事例としながら考えていくこととした。事例論文は、福岡女子大学の櫻木理江先生より提供いただき、参加者の方には事前に目を通して頂くことを課した。

論文修正セッションでは、まず当該論文の主要な問題点を、レフェリーになったつもりで参加者の方に自由に指摘してもらった。さまざまな意見が出たが、理論的な仮説がないことが主要な問題点であることが共有された。その後、当該論文について実際の査読者のコメントも紹介され、やはり理論的仮説の欠如が指摘されていたことが再確認された。

問題点の確認を終え、分析結果から逆向きに、理論的仮説を作ってみるという作業を参加者と共に行った。これは、出来上がってしまった分析結果から学術論文としての骨組みを作るという、研究者が行うプロセスの疑似体験を狙ったものである。時間的制約はあったものの、

参加者と作り上げていく過程で、著者も考えていなかった仮説づくりの方向が作り出された。

研究とは、思い通りにいかないものである。“やってしまった”事態に陥ったときに、どのように論文へと作り上げていくのかという点について、具体的なアドバイスができたのではないかと思っている。

### 3. 参加者の反応など

論文修正セッションでは、既にある分析結果から、仮説設定、研究目的へと後向きに論文を作っていくという、研究者がしばしば行う試行錯誤を疑似体験することで、データから論文を作り上げることの難しさを体感した。逆説的ではあるが、こうした作業の困難さを知ることによって、参加者の方々には「正しい手続きを踏んで研究をすることの重要性」を理解いただけたのではないかと思う。こういうセッションを企画したのは、研究の現実が「問題意識 → 研

究目的 → 先行研究 → 仮説設定 → 検証」という理想的なプロセスにはならないという筆者自身の実体験に基づく。軌道修正に慣れている経験を積んだ研究者ならともかく、若手研究者はこのプロセスで迷い込んで抜け出せなくなってしまうことも多いだろう。迷路から抜け出すプロセスを共有することで、行き詰まった時に何を重視し、逆に何は外してはならないのかという点が具体的に明らかになったという声を、参加者から多くいただくことができたのは収穫であった。なかには、データを集めてから仮説を後付けすることはベテランの研究者でもしているということを知り、安心したという方もいたようである。

最後に、事例論文を提供いただいた櫻木先生に感謝申し上げたい。先生の勇氣あるチャレンジがなければ決して実現することのないセッションであった。